

トピックス

農林業関係機関成果発表会が開催されました

上席研究員 國友 幸夫

農林業関係機関成果発表会は毎年2月はじめに開催されています。農業関係の4試験研究機関と林業試験場、そして農林業の普及機関の成果を広く県民に知っていただくための発表会です。今回は発表会全体で延べ850名の来場者があり、県庁舎28階を会場とした林業分科会もおよそ200名の参加者がありました。



当场研究員は11課題の発表を行い、質疑応答の時間が足りない盛り上がりを見せました。次に当场の発表課題を載せます。詳しくは林業試験場までお問い合わせください。

1 設置から6年経過したぐんま型木製ガードレールの状況	木材係	町田
2 簡易な乾燥施設を使用した木材乾燥	木材係	工藤
3 効率的に放射性物質を低減する栽培管理の実証	きのこ係	坂田
4 原木シイタケ栽培におけるほだ場環境の調査	きのこ係	松本
5 竹おが粉を利用したきのこ菌床栽培の普及に向けて	きのこ係	齊藤
6 カラマツの苗木不足を解消するための取組について	森林科学係	中村
7 人工林植栽地における獣類被害の発生と防除対策	企画・自然環境係	片平
8 県内山間地におけるヤマビル分布について	企画・自然環境係	坂庭
9 強度間伐における林分の変化について	森林科学係	石田
10 県内観光名所におけるサクラの衰退について	森林科学係	伊藤
11 里山環境の復元に向けた伝統的管理の把握	森林科学係	中山

トピックス

「関東中部林業試験研究機関連絡協議会」 研究会を開催しました

森林科学係

石田 敏之

関東中部の森林・林業関係研究機関で構成する任意団体に、関東中部林業試験研究機関連絡協議会という組織があります。協議会では会員相互の連携強化を図る目的でテーマ毎に研究会を設置していて、育種・育林関係では「優良種苗研究会」と「森林の更新技術に関する研究会」が運営されています。

研究会では、年1回参加都県主宰の会議を開催しており、平成28年度は9月1日、伊香保町の「千明仁泉亭」で2つの研究会合同の形で開催しました。今回の会議では「コンテナ苗」について多くの時間を割きましたが、これは両研究会に共通する喫緊の課題です。温泉地での開催は、他県の若手研究員達には新鮮に映ったようで、落ち着いた雰囲気の中、充実した意見交換ができました。翌日は渋川市横堀の「群馬県林木育種場」及び渋川市赤城町の「赤城自然園」で現地検討会を行いました。以下、概要を報告します。

【優良種苗分科会】

優良種苗研究会は、優良種苗の開発や育苗技術について幅広い議論を行うことを目的としています。

今回の出席者は17機関32名で、関東育種基本区に含まれる福島県も参加しています。また、県林政課、群馬県山林種苗緑化協同組合からも担当の方が出席しました。

会議は情報提供として12課題の発表、質疑応答を行い、また、ミニチュア採種園の管理方法や生産した種子の性能、コンテナ苗の育苗方法、種苗生産に関する各種問題点や競争的資金への応募などについて意見交換を行いました。



優良種苗分科会

【更新技術分科会】

森林の更新技術に関する研究会は、「再造林技術の評価」「再造林放棄地の現況把握」を目的としています。

今回の出席者は10機関22名で、森林総合研究所から9人の参加をいただきました。

会議は情報提供として6課題の発表、質疑応答を行い、続いて低密度植栽試験の実施例、コンテナ苗の植栽試験情報、落葉広葉樹天然更新調査事例、天然更新に関する基礎的な情報などについて、意見交換を行いました。



更新技術分科会

【合同会議】

「コンテナ苗の研究・普及の現状」をテーマに掲げ、森林総合研究所、宇都木玄氏をコーディネーターとして発表及び質疑応答を行いました。コンテナ苗による育苗・造林技術は研究途上にありますが、徒長しない形状比の小さい苗を作る必要性が指摘されました。



合同会議

【現地検討会】

「群馬県林木育種場」において、花粉症対策種子を生産しているミニチュア採種園を視察し、改善点について意見交換を行いました。また、コンテナ苗の月別植栽試験地において検討を行いました。

続いて場所を移動し、「赤城自然園」で、森林施業で通常行われる天然更新や一斉造林とは異なる、造園的手法で整備した森林を視察し、意見交換を行いました。



現地検討会の様子

トピックス

「産官学連携概論」～東洋大学の講座をへて～

森林科学係

中村 博一

県では、地域と大学との連携事業を進めています。その一環として東洋大学板倉キャンパスにおいて、各試験研究機関が講義をしています。それが「産官学連携概論」です。平成28年度は、秋学期に全15回、本事業の主管課である次世代産業課を始め、各試験研究機関が順に、産官学連携の取組を実際の研究課題に基づき講義をするというものです。講義時間は各回90分、受講生は生命科学部及び食環境科学部の1年生から3年生の81名でした。

林業試験場は3回目ですが、今回は、森林科学係が担当することになりました。テーマを、「林木育種における産官学連携」とし、講義を行いました。

講義内容は、生物系学部とは言え、林木育種についてはあまり知らない学生を対象にしていることから、まず育種全般について、精英樹(成長や材質の特に優れた木)の選抜から増殖、種子の生産、そして山に植林されるまでの流れを説明しました。その後、今まで行ってきた課題や、現在進めている課題について各研究機関、大学、民間との成果等を紹介し、具体例をあげながら産官学連携のメリットについて講義しました。中でも、スギ・ヒノキの花粉症対策は全国的な問題として、関東を中心に取り組んだ事例を、また現在、喫緊の課題となっているカラマツ苗木不足についても、安定的な苗木生産に向けて、カラマツ林業県である群馬県を含めた関東甲信越から東北、北海道に至る地域の各研究機関や大学、民間と連携して進めていることを紹介講義を終了しました。

慣れない講義ではありましたが、自分たちがこれまで進めてきた研究を客観的な視点で振り返ることができました。また、研究に取り組んでいるときには気がつかなかった足りない部分、あるいは今だから見えてくる利点や成果にあらためて思いが至り、有意義なものでした。講義を通して、あらたな産官学連携が生まれることが期待されます。

トピックス

ミュージアムスクールでの指導について

きのこ係

齊藤 みづほ

今年度きのこ係は、群馬県立自然史博物館で開校されたミュージアムスクール(きのこコース)に、講師として協力しました。ミュージアムスクールは、自然のしくみや群馬の自然をより深く理解し、自然や博物館に積極的に関わろうとする理科好きな子どもを育成する目的で開校されている講座です。きのこコースでは、博物館周辺には、いつどこにどんなきのこが発生するのかを調査しました。

参加した子ども達は、小・中学生5名です。調査は7～10月の間、月1回、自然史博物館周辺で行い、午前中はきのこ採集、午後はきのこの種類を決める同定作業を行いました。

きのこ採集では、ただきのこを採るだけでなく、よく観察し、記録を残すことが大切です。きのこが発生している環境や、きのこの色や形、においなどを観察し、写真やメモで記録しました。同定作業では、図鑑を使ってきのこの種類を子ども達に調べてもらいました。きのこの同定はとても難しい作業なので、わからないときはヒントを出すなど、手助けしながら一緒に行いました。

これまでに子ども達が一生懸命調べてまとめた成果は、3月11日に自然史博物館で開催される研究発表会で発表されます。



きのこ採集の様子



顕微鏡できのこの胞子を観察

トピックス

秋の林業試験場一般公開「高塚の森紅葉まつり」を開催しました

森林科学係

石田 敏之

林業試験場では毎年春と秋の2回一般公開を行い、春は見頃のつつじと樹木園の新緑を満喫していただいています(前号で紹介)。秋の一般公開は昭和60年から開催していますが、平成15年からは榛東村、フォレストぐんま21、群馬県リサイクル緑化協会、日環工ぐんま、日本樹木医会群馬県支部との共催で「高塚の森紅葉まつり」として新たなイベントに衣替えしました。

今年度の開催は11月3日(文化の日)で、好天に恵まれ、およそ1,800人の来場者を迎えることができました。来場者はここ数年増加傾向にあり、林業試験場の施設や研究の紹介、共催する団体の活動紹介を通じて、森林や林業、自然環境への理解を深めてもらう良い機会になっています。

9時30分の開始とともに、きのこや苗木、木材販売のコーナーに人が並び、地元榛東村の商工会が出展する販売ブースでも焼きまんじゅう、ぐんまちゃん焼き、ソーセージなどがよく売れていました。また、村内の小学生、地元サークルの方々による森の音楽祭には多くの方が鑑賞に訪れました。このほか竹馬づくり、お絵かき、焼き芋、ベンチ販売、樹木観察会、森の宝探し、木工広場、きのこが魅せるミクロの世界、回復した傷害鳥の放鳥など趣向を凝らしたイベント満載の1日となりました。



イベント開催チラシ



森の音楽祭



森の宝探し受付